

Amenity & Ecology

住まいと暮らし

9

vol.30 2018 September
[住まいのIoT・AI]

住まいのIoT・AI

人生100年時代の生活機能レジリエント社会①

IoTで変わるこれからの暮らし

IoT・AIの可能性

これからのすまいづくりやまちづくりへの新たな取り組み

インターネットとAIを活用した住まいの見える化の取り組み

世界とつながる窓

住まいがAIに繋がる快適な暮らし



座談会 ヒートポンプ床暖房の魅力と これからの可能性②

床暖房の歴史分析を踏まえて

一般社団法人みてみてオープンハウス・株式会社タフ 吉田和弘
 一般社団法人みてみてオープンハウス 庄田幸司／ダイキン工業株式会社 日下部圭亮 竹田明弘
 株式会社コロナ 藤田 徹 川上岳彦／住商メタレックス株式会社 本橋将一
 三菱電機株式会社 小池英明／三菱電機住環境システムズ株式会社 成瀬純哉
 株式会社テスク 櫻庭高光 城田俊男



床暖房全体でみても、たとえば名古屋では現在年間 3,000 件程度採用されていますが、新築がだいたい年間 35,000 棟で、そのうちの 3,000 件です。ちなみにガスの床暖房は 18,000 ~19,000 件くらいです。建材商社や電材商社がオール電化で大きな役割を果たしていき、IH クッキングヒーターやエコキュートをメインに普及に力を入れています。電気床暖房はまだまだ少ないという状況です。

私はその当時「スローハウスⅠ」という本を発刊いたしました。その本では床暖房は価格が安ければよいということではない、本当に快適な住まいに暮らすためにはなにが必要なのかを考えよう、そうということを発信したかったのです。床暖房は住まいとの相関関係から考え、暮らし方から見るべきだということを伝えたかった。当時は社会的には電気 vs ガスのような風潮でしたが、ある意味活気もあって IH やエコキュートもよく売れた状況だったと思います。名古屋や大阪でもランニングコストを重視する人が多くて、オール電化は人気を博しました。

そして、その後 2011 年に東日本大震災が起こります。電力業界は大きな転換期を迎えます。電気は必ず



写真-2 | みてみてオープンハウス・タフ
吉田和弘氏

吉田 前回から引き続き床暖房の歴史を見ながらヒートポンプの可能性についてお話を進めていきたいと思っています。まずは 2000 年くらいから、ガスの床暖房が普及するにつれて、電気の床暖房もフィルム式が登場します。この頃から灯油ボイラーによる床暖房は市場性をなくし、撤退していく会社が増えていきます。そういった背景の中、2003 年に産声を上げたヒートポンプ式床暖房もまだまだ普及には程遠い状況です。電気